Rio

豊田市矢作川研究所　月報

◆枝下用水とともに
　豊田土地改良区理事長・三浦孝司さんに聞く
◆川の思い出　― 用水編 ―
◆第３回「矢作川天然鮎感謝祭」開催のお知らせ

8
2011
No.155

豊田市矢作川研究所　〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028　e-mail yahagi@yahagigawa.jp　URL http://yahagigawa.jp

枝下用水とともに

豊田土地改良区理事長・三浦孝司さんに聞く

2011 年 6 月 16 日　豊田土地改良区会館（司町）
聞き手　逵（矢作川研究所研究員）・永島（枝下用水 120 年史編集委員）

矢作川を水源として流れる枝下（しだれ）用水。この用水の 120 年史編集に取り組む中で、2010 年度より「枝下用水の話を聞く会」と題して、関係する方々にお話を伺っています。今回は豊田土地改良区理事長・三浦孝司さん（昭和 18〈1943〉年生まれ）にお願いしました。三浦さんは昭和 37（1962）年、明治用水土地改良区に就職し、昭和 43（1968）年、枝下用水土地改良区が明治用水から分離して設立される際、若くして事務局長に就任、これまでの歩みはまさに枝下用水史とともにあります。来年で土地改良区勤め 50 周年になるそうです。改良区の昔話はなかなか職員に話す機会が無いとのこと。三浦さんは事務局長の野場さんと 20 代職員の粕谷さん、加藤さんにも急遽声をかけ、皆さん同席くださいました。

来年で土地改良区勤め 50 周年の三浦さん

水路を良くしてよかったのか

三浦：昔、「古田」は高かった。直接川から水が引けるような田圃を古田って言った。「新田」っていうのは枝下用水の水がなければ引けないっていうことだったけれど、だんだん枝下用水がしっかりしてくると、今度は上流側の方が良いわけだな。下の方は水が行かなくなってくるわけ。そうすると、どっちがいいかっていうと、新田の方が良くなってくる。今度パイプラインにしたらどうなるかっていうと、下の方が圧力かかるものだから、水は良く出てきて、上の方が水が出てこなくなる。オープンの水路の場合、上流側が良く、今パイプラインになったら下流側の方が良くなってくる。

逵　：代々の田畑の価値が変わってくるんですね。

三浦：もっと言うと良くすればするほど人間が横着になったのかな。私が入った当時を思うと、水やなんかものすごく楽になってきている。改良区がずっと長い間工事をやって来てるから。私ら小さい頃、隔番（かくばん）制度（水を一日おきなど交互に流す）っていって、子どもまでかり出されて、水の番をさせられた。

逵　：三浦さんもしてました？

三浦：そりゃしていたよ。そういう時代だから。だんだん用水が良くなって、隔番制度が無くなってくると、今度はどうなってくるかっていうと、水はいつでも当たり前に来るって時代になってきたわけ。

私ら日曜に家にいても電話がかかってくる。「なんだ、今日は水も来んじゃないか、田圃やれへんじゃないか」と。「はい、すいません、何処だん？」と見に行くと、例えば西用水の分水工の１番の基にゴミが掛かっていて、水が入って行かなかっただけの話。昔なら隔番制度やってる頃、他人のイリ（田への水の入り口）詰めてでも自分とこに水を持って来ることやるけど、当たり前に水が来るようになったら、田圃へ行って水が来ていないと、上流に見に行かずに家に戻ってきて電話をすれば水が来ると思ってる。

永島：昔は水路を閉じるために草を刈って詰めていたから、堤防もすごくきれいだったって聞きました。

三浦：良くすりゃ良くするだけ人間はわがままになって、ちょっと行ってゴミ取れば水は入るのにそのこともやらない。良くしてよかったのか悪かったのか、そういう思いがあるけど、役目として良くしなくてはいけないと思う。

米を 50 回つくるということ

逵　：３月の東日本大震災後、放射能汚染が問題となり、「食の安全」っていうのは本当に大切なことだったんだなと。今まで考えてもみなかったことでした。これからどうなるのかなと思って。

野場：食糧危機だとか外国で騒がれていても、日本はね。休耕田どんどん増えていっちゃうっていうのも、本当に食べられなくなってしまう、震災かなんかで食べられなくなっちゃうっていう経験がないものだからね。

三浦：県会（県議会議員）仲間で「百姓・食糧は大切にせなかん」ってよく言うわねえ。「お前作ったことあるのかや？」って言うと、「わしゃぁ無い」って言う。それで、「米ってや、何回作れると思うや？」って、「50 回作れる人は稀だぞ」って。自動車なんか毎日１分に１台くらい作ってる。でも米は 20 歳からやって 50 回、それで 70 歳でしょう。

私は親父が死んで、それまでも手伝いはしていたけれど、自分が 42 歳の時だから、20 数回だけど、議員やったものだからもっとやっていないくらいだ。百姓のことをよく知っていると言っても、15 回、自分で作ったってことになればそういうことになってしまう。ある意味で農業はやり直しのきかないものだってことは事実。加えて天変地異を考えないといかん。台風が来たらいかん、洪水が来たらいかん、日照りになったらいかん、高温であったら、低温であったら。

それらにどう対応といっても、一代で 50 回しか経験しなくて、その中でいろんな変化があって、農業っ

事務局長の野場さん

ていうのはどうやって対応できるかって。自動車を作っているのとはわけが違うということなんだ。今年は不作だ、今年はなんだって平気で書いているけれど、自然との闘いっていうのはそう甘いものではない。

逵　：同じ豊田の土地で、分刻みでできていく車と、１年でようやく実る稲と、異なるサイクルが共存していますね。

三浦：50 回作る人は少ないぞ、これら（同席のみなさん）にも百姓ちょっとやってみよって言うけれど。

逵　：野場さんは？

野場：法人に預けてあって、やったことないです。

三浦：食べ物が変化するっていうのは、自然相手でできたものを食うか、或いは箱の中で培養してできたものか、その変化ってこともあるでしょう。どういう風になっていくのかわからないけれど、どういうものがいいのか、自然、自然食と言いながら、子どもたちはみんなもう自然食というのは不味いもんかもしれない。

トマトの話で私がよく言うけれど、アメリカのトマト工場へ行ったとき、２m位の大きなトレーラーで、それにいっぱいトマトが山盛りに積んであるわけだ。真っ青なカンカチなやつ。それをだーっと洗って消毒して、箱詰めして酸素室へ。赤みが付いたら日本だとかに輸出する。日本に来るうちに赤くなって、それがレストランだとかにいく。そればっかり食べてる子どもはそれがトマトの味で、私たちが小さい頃食べた完熟トマトから言うと、あれはトマトじゃない、不味いものだとなるわけ。

農業国は歴史の中でつくられた

三浦：だからこれからの農業の展望っていうのはわからない。わかったふりするのは罪だと思うしね。だけど、この震災やなんかで農業は大事なことであるということもわかった。

逵　：テレビで被災地の田畑が映って、聞いていると

海水入ったらしばらくはものが作れないというのに、それまで作ってきた歴史がそこにあって、でももう一度作りたいって頑張っている姿をみると、農業ってすごいなあと。

三浦：ヨーロッパの先進国は 100%近い自給率の農業国だっていわれる。なぜ 100%近い自給率を持っているのかというと、私は歴史の中で作り上げられたものだと思う。日本が 39 か 40%の自給率で平気なのも、これも歴史だと思う。ヨーロッパっていうのは常に隣国との戦争があって、戦争が起きた時に自分とこの食糧は自分とこで賄わなくてはいけないわけでしょう？

逵　：用水史を振り返ると戦争の時、国は必死になって用水を整えています。戦中なのにとはじめは思っていたんですけど、戦争だからこそこんなにお金をかけているんだと知りました。

三浦：日本国内でも、江戸時代にしても、戦争をやっていた藩は一生懸命食糧の自給をやってきているわけでしょう。その歴史を忘れてきてるんじゃないの？徳川藩は徳川として守ってきているでしょう。だから、私にいわせればここ 2、30 年、日本人っていうのは歴史を忘れてしまったんだなあ。

買えばいい、それは長い歴史の中で一コマとして残っていくけれど、いずれそういう買えなくなる日が来るのではないかと。自動車・電気産業が栄えて外国と貿易ができたから、輸出できたから買えることであって、できなかったら買えるのか？そういうことでしょう。そういう安全というもの、防衛というものに日本人は麻痺してしまっているんではないだろうか。

豊田土地改良区の若手の加藤さん、粕谷さん

枝下用水の中でも徳川さんが作っただとか、この 2 千町歩の中にあるわけでしょう。酒樽持ってきて用水にしたとか。

永島：偕楽園ですね。

三浦：歴史の中では一生懸命で自給自足できるとこをやってきたんだよな。

三浦さんのお話はそれからいろんな方面に広がりました。紙面の都合で本号ではそのごく一部しか紹介できませんでしたが、『枝下用水日記』Vol.6（2011 年秋発行予定）で改めて掲載の予定です。そちらも読みたいという方は矢作川研究所までお知らせください。

（文責：逵　志保）

川の思い出　―用水編―

内田　朝子

矢作川研究所では、枝下用水 120 年史の編纂が進められており、豊田市の多くの地域で用水開削の功労者・西澤真蔵翁を現在も奉っている様子を知ることができます（『枝下用水 120 年史資料集』その 1）。西澤真蔵講の話を耳にし、私も自身の暮らしと用水との関わりに想いを巡らせてみました。

大井出用水

私の実家は京都の南端、木津川市加茂町という小さな町で、大井手（おおいで）用水が集落の中を流れています。この用水は鎌倉時代、毎年のように水不足に悩む農民をみて、海住山寺（かいじゅうせんじ）の慈心上人（じしんしょうにん）が自ら踏査し完成させたと教わりました。母校で教員をしている従姉に確認すると、大井手用水については現在も市内の全小学 4 年生が学んでいるとのことです。彼らの副読本『わたくしたちのきょう土を開く』で紹介されています。近くの大きな木津川（Rio42 号参照）は農地より低いところを流れているので、支流の和束（わづか）川から水を取り入れたこと、高低差 5.5 mしかなくとも全長 6.8km の長い用水路にしたのは当時としてかなり高度な技術であったことなどが載っています。

農夫だった私の亡父は農作物の収穫は用水あってこそという感謝の念を抱き、折りにふれて、約 800 年前の慈心上人の功績をしみじみとたたえていました。子どもの頃の記憶をたどると、お百姓さんたちの「川そ

うじ」（農繁期前に通水しやすいようにゴミや泥をすくい上げる作業）や「水当番」（渇水期に田毎に水を張っていく作業）の働きによって用水が維持管理されていたことを思い出します。家々で設けたカワト *1 では、祖母たち女性陣が農道具や作業着を洗っていた風景も浮かんできます。また、戦時中に私の実家に疎開していたという親類のおじいさんからは「この川で、毎朝、手水（ちょうず）を使ったんや *2 ！」と当時の水の清さを伝え聞いています。ただ、高度成長期にあった私たちの少年期、生活排水路の役目も兼ねていた用水には美しいイメージがないのが残念です。現在の用水路は、民家の密集した場所では３面コンクリート護岸になってしまいましたが、集落から少し離れると自然護岸が残され、通年、水が涸れない場所が残っています。そこではメダカ、カワムツ、フナ、ドジョウなどの小魚が豊富にいるので、里帰りの度に、子どもたちとガサゴソを楽しむことができます。

現在、愛知県瀬戸市に引っ越して約 10 年が経ちますが、こちらでも用水と縁があって、自宅敷地の南東２画を用水の細流（幅約 20cm）が流れています。この用水によって我が家の庭には沢山の小動物がやってきました。トノサマガエル、ヒメタイコウチ、アメリカザリガニ、ヤゴ、ガガンボの幼虫など希少種から外来種まで玉石混交といえる水生生物たち、他にはシマヘビやジムグリといったちょっと怖い小動物も流れ着き住民となっています。さらに、昨年の猛暑の夜、用水路に面した部屋で床につくと、冷んやりとした風に加えサラサラというせせらぎの音によって心地よい睡眠も得ることができました。

用水によって流れ着いた我が家のトノサマガエル

もっとも身近で日常生活にとけ込んだ小川（用水）の流れは、農業を営んでいない地域住民にもこのように多くの恩恵を与えてくれています。私たち家族は、用水によって生物多様性が高められた庭で季節を感じ、夏に「涼」という潤いを得て暮らしています。

（うちだ　あさこ、豊田市矢作川研究所研究員）

＊１：川べりの洗い場。
＊２：実家あたりでは、年配の人は朝起きて顔を洗うことを「手水を使う」と言う。

▶第３回「矢作川天然鮎感謝祭」開催のお知らせ

今年で３回目となる「天然鮎感謝祭」、三河湾から矢作川へ遡上する天然鮎の恵みに感謝すると共に、矢作川への愛着心を深めてもらうことをねらいとして開催します。矢作川のアユ釣り師が天然アユを釣り、それを腕のいい焼き師が焼き、みんなでおいしいアユの塩焼きを食べる楽しい会です。ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。

◆**日　時**：平成 23 年９月４日（日）
（悪天または増水時は平成 23 年９月 18 日(日)に延期）
◆**場　所**：豊田大橋東側の河川敷（千石公園）
◆**主　催**：天然鮎感謝祭実行委員会
◆**内　容**：鮎釣り大会（午前５時より受付）
講演（午前 11 時～）
鮎の塩焼き大会（講演後）
※矢作川の鮎の釣れ具合により、鮎の塩焼き本数が変わります。
◆**申込み**：鮎釣り大会への参加には事前申し込みが必要。参加費 3,000 円。
◆**問合せ**：釣り大会に関する事項、申込みは　⇒　天狗堂豊田店（0565－32－5280）
その他事項　⇒　豊田市矢作川研究所（0565－34－6860）まで。

後記

朝日新聞の記事「『杁』←この字読めたら愛知県民？でも意味は…」（2011 年７月４日付）で「杁（いり）」・「圦（いり）」が国字（漢字に倣って日本で作られた文字）であることを知った。しかもその発祥は尾張・三河。愛知県では地名等で見かけるため、気にかけたことがなかったが、丘陵地が多く、田畑に水を引くことが困難だった各地では、雨水を池にためて水門を設置、農地に流すその取入れ口にこの国字を当てたという。見直せば三浦さんの記事の中にも、この言葉が登場している。必要から生まれた国字に、確かに暮らしが息づいているのだと思った。（逵）

R100 再生紙を使用しています